

◆2009年 4月

八木健選「七句」・・・（鑑賞も五七五）

1. **納棺の如肅々と雛納め** 西 をさむ
一年後生き返らせる雛納め
2. **おしおきや石乗せられて大根漬** 高田敏男
漬物の大根脚のダイエット
3. **蚯蚓出て五分の魂一寸に** 永島董王
二寸までのびたる蚯蚓地を這へる
4. **はた目には仲睦まじく青き踏む** 松田吉憲
別居から離婚の予定青き踏む
5. **数の子を食めばこめかみ喜べり** 村上美和
コメカミは数の子だとは気付かない
6. **禁酒から僅酒へ梅にこと寄せて** 永井一郎
人間の智慧のひとつになしくずし
7. **残雪や廃校となり名を成せり** 黒田忠一
贅沢な個人授業の終る春

青山桂一

雀どち身を擦り寄せて春話
家猫も白魚食べてご相伴
春疾風着地叶はぬ鴉どち

麻生やよひ

春闘のデモの知己ハローワークでも

秋月裕子

ペン探しめがね探す間つばめ来る
摘んでくれと光を放つ蓬かな
花トンネル鼠追ひかけ猫走る

足立淑子

フロイトも答えに困る春の夢

やどかりの今年もリハウス先探し
期待受け出るに不出られず名草の芽

有吉堅二

花吹雪わが禿頭に二三片
いやいやと落ちる椿もありにけり
四月馬鹿体重計は嘘つかず

飯塚ひろし

卒業をするや勉強したくなり
背丈だけ人に抜ん出て卒業す
春休み捨て損ひて処女である

井口夏子

桃の日に意地悪ばかりの弟よ
地虫やまずは一歩の足を出せ
疑ひの怒りにかわり春の雷

稲沢進一

家の中整理整頓花粉症
鶯や不況不況と聞きみたる
そう云へば昼はうたた寝明易し

今城夏枝

ぼろぼろぼん春昼の五七五
鼻の近づく活けられし花辛夷
さえずりの転げそこねてふたつみつ

奥脇弘久

老桜根を張りつくし孤高なり
いと桜樹齡重ねて懸想立つ
春浅し五六五六茶屋で五七五

可知豊親

酒臭き仕丁を叱り雛飾る
雛納その甲斐もなく出戻りぬ
妻も娘も怒り上戸やお白酒

加藤 賢

春日の苔つと翳りホワイトデー
脳はまだ達者と添へて花便り
落椿己が首筋撫でてみる

川島智子

褒め上手ほめられ上手豆の飯
木蓮で占う花びらの悲鳴

安藤淑子

善不善も為さぬ閑居にホーホケキョ
春炬燵「あれ」と「これ」とで会話成る
春眠を解せぬ夫のしかめ面

井口寿々子

啓蟄やみめうるはしきメジロ来る
ハンカチにたたみ込まれしくさめかな
春の海よしなし事のからみ合ひ

伊藤浩睦

春立てる朝に立たざるもののあり
磯東風のくすぐるそこは性感帯
夜の雛官女ちちくる左大臣

井野ひろみ

幕末の雛と自慢の骨董屋
グラビアの雛寿司豪華目で食す
春愁やパーマ仕上り背を伸ばす

越前春生

甘茶かけ些事と大事を忘れけり
余生とは朝寝を起す人もなく
高々と飛べぬ齡の恋の猫

笠 政人

俳諧が徘徊となる万愚節
句ひとつを捻りあぐねて春の宵
泥亀のどんでん返し春の寺

加藤澄子

卒業式袴にブーツの大軍の
白無垢の花嫁のごと春待花
咲き満ちし母の手塩の花なるよ

加藤留美

春疾風直前に煙従えて
風車並ぶ一つは回りおり
磨崖仏お膝下には春火鉢

草薙一朗

口惜しや臺の立ちたる落の臺
目を凝らす何れが孕雀やら
ペットにも痴呆症あり鳥帰る

工藤泰子

アカペラのやうに唐突初音せり
万愚節おもかる石を放り上ぐ
茎立つや漬物小屋に古滑車

黒田忠一

残雪や廃校となり名を成せり
啓蟄や二度と戻れぬ穴もあり
杉花粉避けて通れぬわが家かな

小玉利助

真面目つ面して洒落とばす
ザブンザブザブ寄せる年波
じりじりじりじり行つてしまった

佐治洋一

春の昼アロエに走る刃持つ妻
春動く伊勢神宮に元総理
線香の煙移り気春の寺

佐藤義子

ウォーキング枯葉が顔にパッシング
雛まつりお雛様より菓子ぞろえ
鏡見て昔の私さがしてる

佐野ゆきこ

今日日の字見付けなつかし母の声
席がない書齋がわりの喫茶店
一枚脱ぎ2枚脱ぎ乗る体重計

清水吞舟

はったいや笑はせ好きの兄も逝き
雷止みて又始まりし妻の唄
病室に忘れし妻の春日傘

壽命秀次

魚屋の店先浅蜷に問ふ在所
びざなしに忍びの如に黄砂かな
お手上げや鬼監督の花粉症

遠足や童の癖に幕の内
世の裏はその辞書になし新社員
ビーナスの添寝の夢に朝寝かな

倉方 稔

持たさるる大きな切符春の旅
猫好きの猫に無視され春愁ふ
ぎこちなく作業衣着込む新社員

小杉 隆

臃かなポンとおいどを人の妻
株下落金のなる木の花散りぬ
指細き平成男児雨の音

桜井宇久夫

啓蟄や脚美人増ゆ温暖化
焦げ跡に仏縁比ぶお水取
浅草に伊予の春風八木健節

佐藤古城

五十句をゴジックで打ちやよひ尽
形よきおぬど日に向け磯菜摘み
春の泥うしのまだらを斑にす

佐野萬里子

雪洞も未だ吊されず初桜
日溜めの草引く手先蛇出づる
WBCの勝利彼岸へも届け

柴田真一

八十の春子供に還るハーモニカ
真つ赤なりこれ木瓜といふ何事ぞ
又風邪かダンディ浅間が嚏して

首藤虎男

木瓜の木が春芽ざめ見し出たら目
句句と鳩笛ならしあいさつす
弁慶がたたら踏んで見せばあり

白井道義

春眠を貧る犬に喝を入れ
人並となりし神童卒業す
それぞれに夢を見てゐる春ごたつ

杉村福郎

鷹鳩と化し豊胸に目をそらす
ぶらんこを紆余曲折に研師こぐ
瓜実のあぎとに一つ春の泥

高田菲路

葛ふと枢めくなり雛納
論文のテーマは「遊び」卒業す
只管打座声の遥かに花の宴

高橋 都

トンネルを抜ければららら春うらら
卒業式保護者欄とも別れゆく
春愁や義母より早き物忘れ

田代青山

しんがりの蝮しやつくりをくり返す
蛇穴を出でてカフカに読みひたる
涅槃図の欠伸のやうな子の嘆き

高田敏男

おしおきや石乗せられて大根漬
これからはレディーファースト菜種河豚
卒業も罪な物なり職は無し

種谷良二

東風吹けど思い起せぬ人の名を
陽炎か眼鏡合わなくなりをるか
ミシュランの三ツ星貴い山笑う

戸谷笑子

苗床や滑稽菌の仕込み時
いつまでも大根足の朝寝かな
恋猫や朝からじやれる柳腰

中沢荘荷

壺焼の屋台素通りしたる悔
万愚節院内マイク僧を呼ぶ
初ざくら流鏑馬少年落馬せり

躰 崇子

日毎変開花しようか桜迷う
北風は一目散でどこへ行く

鈴木和枝

菜の花に最近問う事多くなり
何とかせねばとまず菜の花咲かず
給付金レンゲ・タンポポ咲かせて待つ

高橋真紀子

動物のようにむさぼり春キャベツ
啓蟄や寝ぼうのままである私
振りそでの茶髪でありぬ卒業生

高橋素子

落雲雀撃たれて墜ちるかに落ちる
四本の脚が傘から春の雨
春興や浪曲低く唸りだす

田代青波

啓蟄の引越業のユニホーム
冴返る壁に向きあひるひとり席
蒲公英の植物園の余白かな

田中章子

詠めぬうち桜さくらの散りにけり
人しれず阿修羅も笑ふさくらの夜
ふんはりの桜の中に町のあり

飛田正勝

張り替へて人を憚る春障子
思はざる一期一会や花の下
万愚節天寿の父を祝ひけり

永井一郎

晩成に期待なんとか卒業す
禁酒から僅酒へ梅にこと寄せて
浅蜷奴がちがふ産地の泥を吐く

永島董王

春なれや池の鯉とて恋ごころ
蚯蚓出て五分の魂一寸に
寝違へし首コキコキとお中日

西 をさむ

納棺の如肅々と雛納め
目隠しをされ閨房へ雛納め

いつ出ようつくしわらびはウォーミング それからの事は秘め事難納め

原田 暉

春隣子の駆け回るヨーカ堂
三月やまたも道路を掘り返す
のほほんと春昼の空アドバルン

久松久子

しやぼん玉ぼくら兄弟ぱぴふぺぼ
年の豆サプリメントも増えてをり
一晩で町を消したる雪女

広瀬遊亀男

誰れの悪戯荒すぎないか春嵐
アイドルのような鶯の舌足らず
目覚めよし血圧もよいざ花見

藤森荘吉

がつつんと春もけだるき連結器
と言ふことと結ぶ花の宴
朦朧を楽しんでゐる春の風邪

坊野留吉

人の名もだんだん萎む朧かな
シクラメン愛でても生さぬ若夫婦
叱られしことを持寄りお彼岸会

穂積青水

オシドリやたまには独りで泳ぎたし
アスファルト割つて芽を出す浜大根
三名の卒業祝つて廃校す

前川敏夫

よく売れるほど捨てられるキャベツの葉
目的地あとひと駅の目借時
ワイシャツの紅を見られて鷹鳩に

松尾軍治

七草や今年も言えぬ熱き粥
冬と春天下別目の節分草
紅梅やキャラメル甘し昔しかな

丸山紘一

聖なる日嫁の情けかチョコひとつ
現身か春宵に吼ゆ若侍

彦阪義久

犬ふぐり書いてる改名嘆願書
忘れると笑うが薬春愁
真剣に嘘聞いている万愚節

日根野聖子

もぞもその音のしてゐる啓蟄や
闘牛の額に詰まる負けん気よ
茎立つや上昇志向のまつすぐに

藤岡蒼樹

葉や色紙ちぎり絵に仕上げ
立尿咎めパトカー春の草
花蕊をつつくうぐひす次の枝

藤原セツ子

習ひ事さぼる理由の菜種梅雨
石垣に飾られてゐる古雛
春の風五百羅漢の顔に吹く

星加克己

啓蟄や胃の腑に巣食ふピロリ菌
方角は明後日あたり亀の鳴く
下の字に手抜き勺ひ蜜気楼

堀川亮二

陽炎の老若男女同じくす
葱坊主風に頭突かれゆれてゐる
半分は兄のお古の新入生

松井 勉

良い事は寝て待てと云ふ朝寝する
天を引くには細過ぎる風の糸
雲の上へ薄雲敷いて冬日落つ

松田吉憲

はた目には仲睦まじく青き踏む
餅焼いて言ひ度き事の膨らめる
妻よりも少し生きたし豆の花

三木蒼生

河馬ほどのフェリーの口や春一番
大淀にヘルペスのごと春の鴨

聖なる日嫁の情けかチョコひとつ
現身か春宵に吼ゆ若侍
テポドンは返り討ちせむ春の陣

三塚不二

春うらら踊りましょうかタンゴでも
飼い猫は鈴ちらつかせ島は春
まだ炬燵イチローにさえ老いのかげ

無患子

飼い犬の放屁まぎるる花の宴
春時雨じやれつく犬の一世かな
春ざれや動き止まざる日も水も

むつみ

笑ひ声外にあふれし桜餅
よたよたと庭に入り来る雀の子
外人の何やらうれし春祭

百千草

恋してる君はヒロイン桜草
七転び八起きがなくて陽炎へる
ランドセル手足首生え新入生

森 要

目の白き鳥も愛でるか梅の香を
荒ルギー嚏でとばす花粉かな
酒に酔い恋に酔いたし宵桜

柳澤京子

目くじらを立てて粗相や春嵐
好き好きと白魚ごはんすり食ぶ
ゆうらゆうら揚貴妃桜母の乳房

山下正純

秘事よそに紅梅の燃ゆよそよそに
幾日そ花を衣の早変り
春寒を吹き飛ばしてや山嵐

山本けい子

石垣を滑り連翹の花の滝
春子焼く定額給付を待ちながら
地下足袋の躊躇してゐるいぬふぐり

河馬ほどのフェリーの口や春一番
大淀にヘルペスのごと春の鴨
太陽の黒点として寒鴉

三橋一笑

駄々子の海持つてくと磯遊び
仏の座強き日差しに立ち上がる
お坊様春のランチを召し上がる

虫倉蟬音

天花粉小さき一物そつと寄せ
西瓜切る眼鋭き五人の児
直会も仕切る神主ビール干す

村上美和

数の子を食めばこめかみ喜べり
さらに顔伸ばして仔馬食んでをり
反り返る反り返るこぶしの花は

森岡香代子

菜の花と黄色い帽子の背くらべ
バラの芽やしずくのレンズふくらめる
地球をぐるり流し目の春の月

諸中昌之

潮騒や耳のかたちに牡蠣の殻
揚げらるるカーネル小父さん春の川
馬の屁は凍つと宣う万愚節

山岡冬岳

アロハ着て強気になつてをりにけり
アロハ着て一目置かれをりにけり
背広脱ぎアロハ着こなしをりにけり

山本あかね

鶯笛におぢいさんおばあさん
貼り紙に美味しい可愛いと蛙
先生も花粉症にてあられけり

山本 賜

翁草身を屈めての初対面
ひこばえや軍鶏いつせいに首をのべ
切り花のさくらで人を呼ぶ銀座

横山喜三郎

カーナビに任せて妻は目借時
葉桜へ観光バスの続々と
嫁のなく孫なく軒の燕の子

吉田恵子

麦踏みや思いださせるフラダンス
一年で五センチ伸びて卒業す
幼子の手を離れない流し雛